

こんにちは！ 嘱託員の鈴木です。3月は卒業シーズン。卒業式といえは「蛍の光」や「仰げば尊し」の曲が思い浮びますね。

ところで、私たちは小さいときから様々な音楽を耳にし、音楽の授業でドレミを習いましたから、巧拙はあってもたいてい自然に歌うことができます。しかし、江戸時代には寺子屋などで読み書きや算盤<sup>そろばん</sup>は習いましたが、音楽に関しては音<sup>おん</sup>曲<sup>ぎょく</sup>と称して師匠について長唄や三味線などを習う稽古事にすぎませんでした。そのため、明治前期の人々にとって「歌う」ことはなかなか難しいことだったようです。

明治5年（1872）の学制発布により、現在の音楽にあたる「唱歌」という教科が定められました。しかし実際は、教材もなく教授法も整っていなかったため、「当分之ヲ欠ク」とされて音楽教育はしばらく棚上げされていました。

明治12年、アメリカの師範学校で学び音楽教育の必要を感じていた東京師範学校長の伊沢修二の提唱により、音楽教育の調査研究のため文部省内に音楽取調掛<sup>おんがくとりしらべがかり</sup>（東京芸術大学の前身）が設けられました。音楽取調御用掛となった伊沢は日本・欧米それぞれの音楽の長所を取り入れた教材を目指し、邦楽の大家らやアメリカから招いた音楽教師と協力して『小学唱歌集』を編さんしました。この歌集には、外国曲に日本語の歌詞を付したものを中心に、日本で新たに作詞作曲されたものも採用されており、「蛍の光」は初編（明治14年）、「仰げば尊し」は第3編（同17年）に入れられた外国曲でした。

さて、教材ができれば、今度はそれを教える人材が必要です。そこで、唱歌教員の養成のために音楽取調掛では全国に伝習生を募りました。青森県からは、弘前にあった女子師範学校の最初の卒業生の一人、傍島<sup>そばじま</sup>まねという女性が明治17年に派遣されています。まねは20名の府県派出伝習生の一人として音楽取調掛で学び、帰郷間もない明治18年8月から5年間、青森町にあった青森県師範学校初の女性教師として勤めました。まねの指導により、師範学校の学生たちは初めて「蛍の光」などを歌いましたが、やはり唱歌は苦手教科だったようで、卒業生の思い出にも恥ずかしくて声が震えて出なかったとあります。やがて、まねの指導を受けた師範学校生たちが県内各地で教職につき、青森県でも音楽教育が広まっていったのでした。

市民図書館8階の展示関連図書コーナーに唱歌や伊沢修二に関する本を加えました。懐かしい歌もたくさん載っていますので、ぜひご覧ください。

※今回のトリビアは『新青森市史』通史編3および『伊沢修二』（上沼八郎著 1969年 吉川弘文館）を参考にしました。



展示のようす